

Missa Ordinarium et Requiem (Missa pro defunctis) Proprium

目次

第Ⅰ部	ミサ・レクイエムとは何か	
(A).	ミサ式次第	2
(B).	ミサの歌詞	
	①. 通常文	3
	②. 固有文 ③. レクイエム	4
第Ⅱ部	ラテン語の文法、発音とアクセント	
(A).	文法	5
(B).	発音とアクセント	
	(1). 発音	7
	(2). アクセント	9
第Ⅲ部	ミサ・レクイエム全文逐語訳	
(A).	ミサ通常文	
	1. KYRIE 2. GLORIA	10
	3. CREDO	12
	4. SANCTUS 5. AGNUS DEI	15
(C).	レクイエム固有文	
	1. Introitus	16
	2. Graduale 3. Tractus	17
	4. Sequentia	18
	5. Offertorium	24
	6. Communio 7. Libera me	26
	8. In Paradisum	27
付録1	主の祈り (Pater noster) 全訳	28
付録2	教会暦について	29
	あとがき	31

第Ⅰ部 ミサ、レクイエムとは何か

(A) ミサ式次第・・・カトリック教会におけるミサ式典のフルコース・・・

	固 有 文		通 常 文	
	語り・朗読	歌唱部分	語り・朗読	歌唱部分
入祭儀		Introitus		
	挨拶(主は皆さんと共に、また司祭と共に)			
			回心の祈り	
				KYRIE
				GLORIA
	集会祈願 (祈りましょう...)			
言葉の典礼	旧約朗読			
		Graduale		
	使徒書簡朗読			
		Alleluia / Tractus		
		Sequentia		
	福音書朗読			
	説教			
				CREDO
感謝の典礼 (聖体祭儀)		Offertorium	(奉納・・・祭壇にパンとワインが準備される)	
	奉納祈願(密唱)			
	叙唱			
				SANCTUS
			奉献文(典文, canon、聖変化の儀式)	
交わりの儀 (聖体拝領儀)			主の祈り(Pater noster)	
			平和の挨拶	
				AGNUS DEI
		Communio	(聖体となったパンとぶどう酒を拝領する)	
	聖体拝領祈願			
閉祭の儀			Ite missa est (行け、ミサ終わりぬ)	Deo Gratias (神に感謝)

- ・喜悅に満ちた典礼(復活祭など)では Graduale をカットして Alleluia 2回
- ・苦悩・痛悔の典礼(レクイエムなど、また待降節・四旬節の期間)には GLORIA は歌わない。また Alleluia の代わりに Tractus を歌う。
- ・レクイエムでは CREDO はカット
- ・「主の祈り Pater noster」の訳、および教会暦についての解説は巻末付録につけた。
- ・「Ite, missa est.」・・・Ite (eo = 英 go の2人称複数現在の命令形)。est (be 動詞の3人称単数現在)。
missa は、動詞 mitto (派遣する)の完了分詞 missus の女性主格(トマス・アクィナスによればその主語は hostia)である。直訳すると「汝等は行け、(犠牲は)派遣された」となる。
いずれにせよ missa という単語は「ミッション」の語源でもあるのである。

(B). ミサの歌詞・・・通常文 & 固有文・・・

①. 通常文 (Missa ordinarium)

いかなる種類のミサ式典においても共通な歌詞。

KYRIE、GLORIA、CREDO、SANCTUS、AGNUS DEI の 5 つからなる。

作曲される場合、5 つセットのものを「完全ミサ (Missa Tota)」という。

5 つそれぞれの部分が単独で作曲されたものも多い。

(1). KYRIE (求憐誦)

もともとは、古いギリシア語の祈りの句 “Kyrie eleison” を、父・子・聖霊に対して 3 回ずつ計 9 回繰り返していた。後に真ん中の 3 回を “Christe eleison” とラテン語＋ギリシア語で言い換えるようになった。

(2). GLORIA (栄光頌)

第 1 ～ 8 節が父なる神、第 9 ～ 16 節が子キリスト、第 17 節が聖霊への頌歌。

(3). CREDO (信仰宣言)

325 年、ニケーア公会議において、後に三位一体説に発展するアタナシウス派が正統とされ、アリウス派を異端とした。この会議で「原ニカイア信条」が決定された。その後 381 年、第 1 回コンスタンティノポリス公会議において改訂され、「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」となった。これが CREDO の歌詞である。第 1 ～ 2 節が父なる神、第 3 ～ 12 節が子キリスト、第 13 ～ 14 節が聖霊、第 15 節が教会、第 16 節が洗礼、第 17 節が復活と来世への信仰宣言。

なお第 13 節に「qui ex patre, filioque procedit.」とある。関係詞節で「(聖霊は) 父と子から出で」という訳になる。しかし「信条」の本来の文は「qui ex patre procedit.」(聖霊は父より出で) である。「filioque (子と)」の語は、9 世紀にローマ教会が勝手に付加したものである。その結果、これに反対したコンスタンティノープル教会との「大分裂」(1055 年) という事態になった。(これを「フィリオクエ問題」という。) filioque = filio (子) + que (～と＝接続詞 et)

(4). SANCTUS (三聖頌、感謝の賛歌)

曲は Sabctus と Benedictus の 2 部分に分かれる。前者は聖三位一体への賛歌で、3 回 Sanctus と唱える。後者はイエスのエルサレム入城の際に歌われた、救世主キリストへの賛美である (ヨハネ 12:13)。それぞれの後に Hosanna が続けられる。Hosanna はヘブライ語の音訳で、もとの意味は「救いたまえと (我らは) 祈る」。

(5). AGNUS DEI (神羔誦、平和の賛歌)

聖体拝領のパンを割く儀式の際に歌われたのが起源。子羊は神に捧げる犠牲に用いられる。イエスの十字架上の死は、その犠牲の子羊に例えられ、その流す血によって全人類の罪を洗い清める。

②. 固有文 (proprium)

教会暦の各記念日に固有の歌詞がある部分。例えば同じ「Introitus(入祭唱)」でも復活祭やクリスマス、あるいはレクイエムなどで、それぞれ歌詞が違うということ。教会暦については巻末の付録2で解説してある。

③. レクイエム (死者のためのミサ曲、Missa pro defunctis)

死者のためのミサは、「諸死者の記念日(11/2)」の他、死去・葬儀・年忌などの際に行われる。歌詞の種目は次のようになる。

- | | | |
|--------------|-------|-------------|
| 1. Introitus | (入祭唱) | Requiem.... |
| 2. KYRIE | | |
| 3. Graduale | (昇階唱) | Requiem.... |
| 4. Tractus | (詠唱) | Absolve.... |

Graduale、Tractus 2つの歌詞はトリエント公会議(1545-63)後の1570年に改訂されたもの。

それ以前は Graduale が「Si ambulem in medio umbrae mortis」、Tractus が「Sicut cervus desiderat ad fontes aquarum」だった。(後者はパレストリーナの単品モテットでも有名な歌詞。)

近代では作曲する場合、Graduale と Tractus は省略されることが一般的である。ケルビーニとドヴォルザークが Graduale を作曲している。

なお第2ヴァチカン公会議(1962-65)で、死者ミサでも Alleluia が規定され、Alleluia 3通りと Tractus 4通りの中から選べるようになった。

- | | | |
|--------------|------|-----------|
| 5. Sequentia | (続唱) | Dies irae |
|--------------|------|-----------|

Dies irae はトリエント公会議で公認された4つの Sequentia の一つである。しかし第2ヴァチカン公会議において、「死後の恐怖を強調しすぎている」等の理由で廃止された。聖務日課(教会の祈り)においては賛歌として使用できる。

3行単位で脚韻を踏んだ典礼文の傑作。このグレゴリオ聖歌の旋律はベルリオーズの幻想交響曲などに引用されている。一方、フォーレ、デュリュフレはこれをカットしている。

- | | | |
|----------------|-------|-------------|
| 6. Offertorium | (奉献唱) | Domine Jesu |
|----------------|-------|-------------|

フォーレは、Sed signifer Sanctus Michael の節をカットしている。

また、フォーレ、デュリュフレのレクイエムでは、奉献唱の後に「Pie Jesu」が歌われるが、それは上記 Dies irae の末尾2行である。

7. SANCTUS

8. AGNUS DEI

※通常とは歌詞が異なる。

- | | | |
|-------------|---------|--|
| 9. Communio | (聖体拝領唱) | |
|-------------|---------|--|

※ 死者ミサ本体はここまで

10. 赦祷文 (Libera me)

葬儀の際に、死者ミサに続く「**赦祷式**」(Absolutio ad tumbam)において司祭が唱える文。ヴェルディ、フォーレ、デュリュフレらが作曲しているが、第2ヴァチカン公会議で式文としては廃止された(理由は Dies irae と同じか?)。一般聖歌としては残されている。

11. 楽園歌 (In Paradisum)

赦祷式が終わった後、**出棺**の際に歌われる。フォーレ、デュリュフレらが作曲している。第2ヴァチカン公会議で改訂された。(前半部を詩篇16との交唱とし、後半は削除。)

第Ⅱ部 ラテン語の文法、発音とアクセント

(A). 文法

ミサ・レクイエム全文逐語訳で使用する記号を「」で記している。

- ◎ 名詞
- | | | |
|---|---|-----------------------------|
| { | 性 | 男性名詞「m」、女性名詞「f」、中性名「n」 |
| | 数 | 単数「s」、複数「p」 |
| | 格 | 「主」、「呼」、「属」、「与」、「対」、「奪」の6種類 |
- ・主格(nominative) …… ～は、が =主語、主格補語
 - ・呼格(vocative) …… ～よ！ =呼びかけ(主格と同型のことが多い)
 - ・属格(genitive) …… ～の =所有
 - ・与格(dative) …… ～に =間接目的、～にとって、～のために
 - ・対格(accusative) …… ～を =直接目的
 - ・奪格(ablative) …… 場所、起点、分離、手段など様々な用法がある

◎代名詞 「代」 性・数については名詞と同じ表記

人称代名詞		主格	属格	与格	対格	奪格
1 人称	単数	ego	mei	mihi	me	me
	複数	nos	nostri, nostrum	nobis	nos	nobis
2 人称	単数	tu	tui	tibi	te	te
	複数	vos	vestri, vestrum	vobis	vos	vobis

- ・3人称の人称代名詞は無い。3人称には指示代名詞を代用する。
「is」 m.s.主、「ea」 f.s.主、「id」 n.s.主(フロイト心理学の「イド」、独語で「エス es」)
「ejus」 mfn.s.属(彼の)、「eis」 mfn.p.与(彼らに、奪格も同形)
- ・指示代名詞、指示形容詞 …… 「指代」「指形」と表記。
illa(指形 f.m.主奪)、illis(指形 f.p.奪)
- ・所有形容詞……人称代名詞の所有格に相当するもの。「所形」と表記。

◎形容詞 …… 「形」。形容詞の性・数・格は修飾する名詞と同じ。「形,m.p.奪」
形容詞はそのまま名詞化する。その場合は「形名」と表記。

◎副詞、接続詞…… 「adv」「conj」

◎前置詞…… 「prep」

ad(対格、～へ・に)、ante(対格、～より先に)、
inter(対格、～の中へ)、per(対格、～を以て)
in(対格、～の方向へ、credo in ～を信ずる)(奪格、～の中に)
propter(対格、～のために、～のゆえに)、secundum(対格、～の通りに)
ab(奪格、～によって、～から)、de・ex(奪格、～から・より)、
pro(奪格、～のために)、cum(奪格、～と共に)、sub(奪格、～の下で)

◎関係詞、疑問詞 …… 「関代」「関副」、「疑代」「疑形」

		主格	属格	与格	対格	奪格
単数	男性	qui	cujus	cui	quem	quo
	女性	quae			quam	qua
	中性	quod			quod	quo
複数	男性	qui	quorum	quibus	quos	quibus
	女性	quae	quarum		quas	
	中性	quae	quorum		quae	

quis (=who), quid (=what), quando (=when), quantus (=how), ubi (=where)

◎ esse……英語の be 動詞に相当するので「beV」と表記

直説法,現在	単数	複数
1 人称	sum	sumus
2 人称	es	estis
3 人称	est	sunt

sit (3s 現在、接続法)

erit (3s 未来)

erat (3s 未完了過去) …Magnificat に出てくる

◎動詞「V」

- ・人称 …… 1 人称「1」、2 人称「2」、3 人称「3」
- ・数 …… 単数「s」、複数「p」 ※の3つはここでは扱わない
- ・時制 …… 現在形「現」 present、未完了過去 imperfect ※、未来形「未」 future
完了形「完」 perfect、過去完了 pluperfect ※、未来完了 future perfect ※

※以上 3 つのみの表記の場合は、「能相」「直接法 indicative」である。(V.3s 現)

- ・所相 (passive) …… 「受」＝受動態 (⇔ 能相＝能動態 active)
- ・命令法 (imperative) …… 「命」 人称・数などは命令される対象による。
- ・接続法 (subjunctive) …… 「接」 願望や仮定などの意味を表す。
- ・不定詞 (infinitive) …… 「不定」
不定詞は動名詞的にも使われるが、別に「動名詞 gerundium」もある
- ・分詞 (participle)
現在分詞「現分」……能相の形容詞・名詞 「～する (人、もの)」
未来分詞「未分」……能相の形容詞・名詞 「～するはずの (人、もの)」
完了分詞「完分」……所相の形容詞・名詞 「～された (人、もの)」

be 動詞とセットで「完了の受動態」となる

deponentia

- ・形式所相動詞……所相 (受動態) の形 (完分 + beV) でも意味が能動態である動詞
morior (死ぬ)、admiror (驚く)、confiteor (認める) 等、結構重要な動詞がある。

CREDO 第 10 節「passus est (苦しみを受けた)」 動詞 patior

CREDO 第 14 節「qui locutus est per Prophetas」 動詞 loquor (語る)

×「聖霊 (関代 qui) は預言者によって語られた」

◎「聖霊は預言者を通して語った」

- ・動形容詞 (gerundivum) …… 所相の形容詞・名詞 「～せらるべき (人、もの)」
Dies irae の 第 8 節「salvandos」、同第 19 節「judicandus」

(B). 発音とアクセント

(1). 発音

ラテン語は、時代とともに発音が変化している。共和政ローマ末期（BC. 1 世紀）、カエサル(CAESAR)や雄弁家キケロー(CICERO)の時代が「古典期」と呼ばれ、この時代の発音が“正調”とされている。

しかし紀元後 1～2 世紀には既に変化が始まり、2 人の名は「カイサル」「キケロ」となった。これが 3 世紀には「ケーサル」「キーケロ」となり、5 世紀には「ツェーサル（チエーサル）」「ツィーツェロ（チーチェロ）」とイタリア語風の発音になって、これがローマ教会の発音のもとになったようだ。

他のヨーロッパ各国でも自国語式発音でのラテン語教育が 20 世紀まで続いた。イギリスでは virus(毒)を「ヴァイラス」と発音しながら、「それがラテン語だ」と考えていたのである。

現在の「教会式」の発音は、1903 年、ローマ教皇ピウス 10 世が承認したものである。

一方、ドイツではドイツ語式発音でバッハの作品やオルフ「カルミナ・ブラーナ」等が歌われる。

（フランス語訛りでのフォーレ「レクイエム」の演奏もある。ジャン・フルネ指揮日本フォーレ協会の録音を聴くと、Jesu「ジェズユ」、luceat「リュエセアト」などと発音している。）

母音

a,e,i, o,u	古典式では長母音（狭い母音）と短母音（広い母音）の区別あり。ドイツ式も同じ。 教会式では長短の区別をしない。が、アクセントの位置を知るために古典の長短の知識が必要。
y	ギリシア語の Y(υ, ユプシロン)を表す綴り。古典式ではドイツ語の ü に近い発音（長短区別）。 教会式では i と同じ（長短区別なし）。ドイツ式では ü と同じ発音（長の区別）。
ei,eu ui,au	二重母音。ただし au 以外の 3 つの場合は、2 文字の間で音節が切れることも多い。 (活用語尾の場合など) Dei, Deus, huic
ae	古典式では[アイ]に近い[アエ] (Caesar, カエサル)。帝政時代後、合字 Æ(æ)で綴られる。 教会式では e と同じ。ドイツ式では ä と同じで長母音。例外: Michāel「ミカエル」「ミヒャエル」
oe	古典式では[オイ]に近い[オエ] (Oedipus, オイディプス)。帝政時代後、合字 Œ(œ)で綴られる。 教会式では e と同じ。ドイツ式では ö と同じで長母音。

※. ミサ曲などでは「天」は coeli と綴られている（古典読みでコエリ）。しかし本来は caeli (カエリ) である。合字の小文字が ae と oe で形が似ており、両者とも発音が「エ」で同じことから coeli に変化してしまったらしい。最近の教会の綴りでは caeli となっているようである。

半母音

[y] (ヤ行)	元は I で子音・母音の[イ]だった。後、子音の[イ]のために J の文字が作られた。 さらに後、子音 J を[ジ]と発音をする言語では、y をヤ行の子音に使用するようになった。 古典期には、IVLIVS の綴りで「ユーリウス」、IESVS で「イエースス」だった。
[w] (ワ行)	元は V で子音・母音の[ウ]だった。後、母音の[ウ]のために中世に U が作られた。 さらに後、子音 V を「ヴ」と発音をする言語では、新たに子音[ウ]を表す W が作られた。 古典期には、OCTAVIANVS の綴りで「オクタウィアヌス」、VENVS で「ウェヌス」だった。 ローマ教会式では子音の V は[ヴ]の発音なので、Ave Maria「アヴェ・マリア」となる。

子音

b, d, f, k, l, m, n, p, r, t ……基本的に綴り通り。ただし以下に特記された場合は注意。	
b	全て [b]。ただし s, t の前では [p]。
c	古典式 …… 常に [k]。 教会式 …… 後ろが e, ae, oe, i, y の時のみ、c は [tʃ]、cc は [ttʃ]。 ドイツ …… 後ろが e, ae, oe, i, y の時のみ、c は [ts]、cc は [kts]。
g	古典式・ドイツ式 …… 常に [g]。 教会式 …… 後ろが e, ae, oe, i, y の時のみ [dʒ]。他は [g]。
gn	古典式 …… [ɲn]。教会式 …… [ɲ]。ドイツ …… [gn]。 Agnus …… 順に [アグヌス] (「ぐ」は鼻濁音)、「アニュス」、「アグヌス」(「グ」は濁音)
ng	古典式・ドイツ式 …… [ŋg]。g の前の n が [ŋ] になる。 教会式 …… 後ろが e, i, ae, oe, y の時のみ [ndʒ]。
ngu	母音の前では「ngw」。
h	古典式・ドイツ式 …… [h]。ハ行の発音 (ただしドイツ語の ch にならないよう注意)。 教会式 …… 無音化。ただし例外: mihi 「ミキ」、nihil 「ニキル」では [k]。
qu	(常に q+u) 古典式・教会式 …… [kw]。ドイツ式 …… [kv]。Qui 「クウィ」「クヴィ」
s	古典式は常に [s]。教会式では母音に挟まれると [z]。 ドイツ式だと、「語頭の s + 母音」でも [z]。
sc	古典式 …… 常に綴り通り [sk]。 教会式 …… 後ろが e, ae, oe, i, y の時のみ [ʃ]。 ドイツ …… 後ろが e, ae, oe, i, y の時のみ [sts]。
ti	古典式 …… 常に綴り通り [ti]。 教会式・ドイツ式※ …… 「ti+母音」は [tsi (ツイ)] となるが、 前に s, t, x がきて「sti+母音」「tti+母音」「xti+母音」となる場合は [ti] のまま。 gratias、natio、Pontio は「ツイ」。hostias、justis、tristia は「ティ」。 例外: ギリシア由来の tiara 等や、形式所相動詞の活用では後ろが母音でも「ティ」。
z	古典式 …… [z]。教会式 …… [dz]。ドイツ式 …… [ts]。
x	常に [ks]。ただし、「教会式では『ex+ (h,s) +母音』の時は [gz]」との説明も見られる。 (exaudi 「エグザウディ」、exultate 「エグズルターテ」)
xc	古典式 …… 常に綴り通り [ksk]。 教会式 …… 後ろが e, ae, oe, i, y の時のみ [kʃ]。 ドイツ …… 後ろが e, ae, oe, i, y の時のみ [kts]。
ch th, rh	ギリシア語の χ, θ, ρ。 [kʰ] [tʰ] [rʰ] (氣息音が入る)。→ 結局、常に [k] [t] [r]。 ただし ch は、ドイツ式では [x, ハーフ・ホ] [ç, ヒ] となることもある。 brachio [braxio]、Michael [miçael]。しかし pulchra [pulkra]。
ph	ギリシア語の φ [pʰ] (同上)。→ 結局、古典式では [p]。教会式・ドイツ式では [f]。

※ ドイツ式「ti」の発音について

カール・リヒター指揮の録音では全て [ティ] の発音だが、ヘルムート・リリング指揮では Gratias や etiam などは「ツイ」でこれは教会式と同じである。おそらく“本来のドイツ訛り”はリヒター盤で聴けるものであり、その後、ドイツでも次第に教会式に合わせるようになったのではないかな?

※ quicquid [kwik.kwid] …… ドイツ式では [kviskvid] となるようだ。(カルミナ・ブラーナに出てくる。)

(2). アクセント

ラテン語の単語における第1アクセントの位置は、基本的に後ろから2番目か3番目の音節である。それより前や、最後にくることはない。

なお、古典ラテン語のアクセントは、強弱ではなく高低アクセントだった。

まず「音節の切り方」から。

1. 音節は「母音」の数だけある。二重母音は1個の母音と考える。
2. 間に含まれる「1個の子音」は、後ろの母音と同じ音節に属する。
3. 間に「同じ子音が2個（二重子音）」の場合、前と後ろの音節で1個ずつわけける。
4. 間に「異なる子音が複数」の場合は、最初の1個が前、残りは後ろの音節に入れる。
5. ただし「閉鎖音 (c, g, p, b, t, d) + 流音 (l, r)」の組み合わせは切り離さず、後ろの音節に入れる。

laudate・・・「lau-dā-te」	scripturas・・・「scrip-tū-ras」	scriptus・・・「scrip-tus」
lacrimosa・・・「la-cri-mō-sa」	ecclesiam「ec-clē-si-am」 ..	etc.

その上で、「長い音節」と「短い音節」を区別する。

「長い音節」は次の2通り。

- (1). 長母音・二重母音を含む音節
- (2). 短母音の音節であっても、その後ろが子音で閉じる「閉音節」は“長い”。
(このことを“位置によって長い”と呼ぶ。)

つまり、短母音+その後ろに子音が無い「開音節」は“短い”、ということになる。

ここで、第1アクセントは、

A. 2音節の単語の場合は、**常に前の音節にアクセント**がある。

B. 3音節以上の単語の場合は、

**後ろから2番目の音節が「長い音節」ならばそこにアクセント、
そうでなければ、後ろから3番目の音節にアクセント、**となる。

ただし、-que -ve -ne -ce -met のような、前の単語に続けて書かれる前接語 (enclitic) がついた場合は、その前接語のすぐ前の音節にアクセントがおかれる。

例： filio は、「fī-li-ō」なので「fī」にアクセント。
filioque 「fī-li-ō-que」は、「ō」にアクセント。

現在のローマ・カトリック教会式発音では、長母音・短母音の区別をしないが、アクセントの位置を知るためには、古典式の長・短の区別を知っている必要があるのである。

この後のミサ・レクイエム全文逐語訳では、複数の音節からなる単語の**第1アクセントの音節**に次のような印をつけた。それ以外の場所には、1音節の単語のいくつかに長母音記号をつけた他は何もつけなかった。

- ・長母音でアクセントの場合・・・ ā, ī, ū, ē, ō
- ・短母音でアクセントの場合・・・ á, í, ú, é, ó, ý ともに大文字も同様
- ・ae, oe でアクセントの時は e の上に印をつけた (aé, oé)。

第Ⅲ部 ミサ・レクイエム全文逐語訳

以下の逐語訳は、独学によるものなので、完全なものではないことを、あらかじめお断りしておく。

(A). ミサ通常文

1. KYRIE

- ①. Kýrie eléison. ②. Chríste eléison. ③. Kýrie eléison.
 主よ 憐れみ給え キリストよ 憐れみ給え
 【ギリシア語】 【ギリシア語】 m.s.呼

2. GLORIA

- ①. Glōria in excélsis Déo.
 栄光が ～に 天（至高の） 神に
 f.s.主 prep 形名,m.s.奪 m.s.与
- ②. Et in térra pāx homínibus bónae voluntātis.
 そして ～に 地 平和が 人々に 善い 意志の
 conj prep f.s.奪 f.s.主 m.p.与 形,f.s.属 f.s.属
- ③. Laudāmus tē.
 我々は称賛する 汝を
 V.1p 現 代 2s.対
- ④. Benedīcimus tē.
 我々は祝福する 汝を
 V.1p 現 代 2s.対
- ⑤. Adorāmus tē.
 我々は崇拝する 汝を
 V.1p 現 代 2s.対
- ⑥. Glorificāmus tē.
 我々は崇める 汝を
 V.1p 現 代 2s.対
- ⑦. Grāτίας ágimus tíbi própter māgnam glōriam túam.
 感謝を 我々は～する 汝に ～ゆえに 大いなる 栄光 汝の
 f.p.対 V.1p 現 代 2s.与 prep 形,f.s.対 f.s.対 所形 2s,f.対
- ⑧. Dómine Déus, rēx coeléstis, Déus Páter omnípotens.
 主よ 神よ 王よ 天の 神よ 父よ 全能の
 m.s.呼 m.s.呼 m.s.呼 形,m.s.呼 m.s.呼 m.s.呼 形,m.s.呼

⑨. Dómine Fīli unigénite, Jēsu Chríste. ※
 主よ 子よ ひとり子である イエス・キリストよ
 m.s.呼 m.s.呼 ←----- 形,m.s.呼 m.s.呼

⑩. Dómine Déus, Āgnus Déi, Fīlius Pátris.
 主よ 神よ 子羊 神の 御子 父の
 m.s.呼 m.s.呼 m.s.主 ←--- m.s.属 m.s.主 ←--- m.s.属

⑪. Quī tóllis peccāta mún̄di, miserēre nōbis.
 [主] 取り除く 罪を 世の 憐れみ給え 我々を
 関代 s.主 → V.2s 現 ← n.p.対 ←--- m.s.属 V.2s 現.命 ← 代 1p.与

⑫. Quī tóllis peccāta mún̄di, súscipe deprecatiōnem nōstram.
 聞き入れ給え 哀願を 我々の
 V.2s 現.命 ← f.s.対 ←----- 所形 1p.f.対

⑬. Quī sédes ad dēxteram pátris, miserēre nōbis.
 [主] 座する ～に 右 父の
 関代 s.主 → V.2s 現 ← prep ----- f.s.対 ←----- m.s.属

⑭. Quóniam tū sōlus sánctus, ⑮. Tū sōlus dóminus.
 ～だから 汝が 唯一の 聖なる 汝が 唯一の 主
 conj (=Because) 代 2s.主 形,m.s.主 → 形,m.s.主 代 2s.主 形,m.s.主 --→ m.s.主

⑯. Tū sōlus altíssimus, Jēsu Chríste.
 汝が 唯一の 至高なる イエス・キリストよ
 代 2s.主 形,m.s.主 ---→ 形,m.s.主 m.s.呼

⑰. Cúm Sáncto Spīritu,
 ～と共に 聖なる 霊
 prep (=with) 形,m.s.奪 ---→ m.s.奪
 in glōria Déi Pátris. Amen.
 ～にて 栄光 神の 父の アーメン。
 prep --- f.s.奪 ←--- m.s.属 m.s.属

※. ⑨の末尾、バッハ「ロ短調ミサ」では、「Jesu Chríste Altíssime.」
 至高の (形,m.s.呼)

3. CREDO

①. Crēdo in ūnum Déum,

私は～を信じる 唯一の 神を
V,1s 現 - - - prep 形,m.s.対 - - - m.s.対

②. Pátrē omnipoténtē, Factōrē coeli et terrae,

父を 全能の 創造主を 天の と 地の
m.s.対 形,m.s.対 m.s.対 n.s.属 conj f.s.属

visibíliū ómnium et invisibíliū,
見えるもの 全ての と 見えないもの

n.p.属 形,n.p.属 conj n.p.属

(Credo 信ずる)

③. Et in ūnum Dóminum, Jēsum Chrístum,

そして ～を 唯一の 主を イエス・キリストを
conj prep 形,m.s.対 m.s.対 m.s.対

Fíliū Déi unigénitū.

御子を 神の ひとり子である
m.s.対 m.s.属 形,m.s.対

④. Et ex pátre nātum ánte ómnia saécula.

そして ～から 父 生まれた ～より先に 全ての 世
conj prep m.s.奪 形,m.s.対 prep 形,n.p.対 n.p.対

⑤. Déum de Déo, lūmen de lūmine,

神を ～よりの 神 光を ～よりの 光
m.s.対 prep m.s.奪 n.s.対 prep n.s.奪

(信ずる)

⑥. Déum vērū de Déo vēro.

神を まことの ～よりの 神 まことの
m.s.対 形,m.s.対 prep n.s.奪 形,m.s.奪

⑦. Génitū, non fáctū, consubstantiālem pátri:

生まれたる ～ではなく 作られた 同体の 父と
形,m.s.対 adv 形,m.s.対 形,m.s.対 m.s.与

per quem ómnia fácta sunt.

～によって [主を] 全ての物は 作られた
prep 関代 s.対 n.p.主 V.完分 beV.3p 現

(信ずる)

⑧. Qui propter nōs hōmines,

[主は] ~のために 我々 人々

関代 s.主 prep ----- 代 1p.対 ===== m.p.対

et propter nōstram salūtem descēdit de coēlis.

~と ~のために 我々の 救い 降り来た ~より 天

conj prep \ 所形 1p,f.対 ----- f.s.対 V.3s 完 ----- prep --- n.p.奪

⑨. Et incarnātus est de Spīritu Sāncto

そして 肉体を与えられた ~により 霊 聖なる

conj V.完分 ----- beV.3s 現 ----- prep ----- m.s.奪 ----- 形,m.s.奪

ex Mariā Vīrgine: et hōmo factus est.

~から マリア 処女 そして 人 ~に成られた

prep ----- f.s.奪 ===== f.s.奪 conj com.s.主 ----- V.完分 --- beV.3s 現

⑩. Crucifixus étiam pro nōbis sub Pōntio Pilāto:

十字架につけられ さらにまた ~のために 我々 ~の下で ポンティオ・ピラト

V.完分 conj prep ----- 代 1p.奪 prep ----- m.s.奪

pāssus, et sepūltus est.

苦しみを受け そして 葬られた

V.完分 conj V.完分 beV.3s 現

⑪. Et resurrēxit tertia dīe, secūndum scriptūras.

そして 復活した 第3の 日に ~の通りに 聖書の記述

conj V.3s 完 形,f.s.奪 ----- f.s.奪 prep ----- f.p.対

Et ascēdit in coelum: sédet ad dexteram Patris.

そして 登った ~へ 天 座する ~に 右 父の

conj V.3s 完 ----- prep --- n.s.対 V.3s 現 ----- prep --- f.s.対 ----- m.s.属

⑫. Et iterum ventūrus est cum glōria

そして 再び 来るだろう ~と共に 栄光

conj adv ----- V.未分 ----- beV.3s 現 ----- prep ----- f.s.奪

judicāre vivos et mortuos:

裁きに 生ける者たち と 死せる者たち を

V.不定.現 m.p.対 ----- conj ----- m.p.対

cūjus rēgni nōn erit finis.

[主の] 国の ~ない ~だろう 終末は

関代 s.属 ----- n.s.属 ----- adv ----- beV.3s 未 ----- m.s.主

⑬. Et in Spīritum Sāncutum Dóminum, et vivificāntem:

そして ～を(信ずる) 霊を 聖なる 主を そして 生気を与える

conj prep m.s.対 形,m.s.対 m.s.対 conj 形,m.s.対

qui ex pátre, filiōque procēdit.

〔聖霊は〕 ～より 父 ～と子 出ずる

関代 s.主 prep m.s.奪 m.s.奪+ conj(et) V.3s 現

⑭. Qui cum Pátre,

〔聖霊は〕 ～と共に 父

関代 s.主 prep m.s.奪

et Filio símul adorātur, et conglorificātur:

～と 子 ～と同時に 崇拝される そして 讃えられる

conj m.s.奪 adv V.3s 現.受 conj V.3s 現.受

qui locūtus est per Prophētas.

〔聖霊は〕 語った※ ～を通じて 預言者たち

関代 s.主 V.完分 beV.3s 現 prep m.p.対

※形式は受動態だが
意味は能動態

⑮. Et ūnam sánctam cathólicam

そして 唯一の 聖なる 普遍の

conj 形.f.s.対 形.f.s.対 形.f.s.対

et apostólicam Ecclēsiām.

そして 使徒継承の 教会を → (信ずる credo in)

conj 形.f.s.対 f.s.対

⑯. Confíteor ūnum baptísma in remissiōnem peccatōrum.

私は承認する 唯一の 洗礼を ～のための 許し 罪々の

V.1s 現 形.n.s.対 n.s.対 prep f.s.対 n.p.属

⑰. Et expécto resurrectionem mortuōrum,

そして 私は待ち望む 復活を 死者たちの

conj V.1s 現 f.s.対 m.p.属

et vītam ventūri saécli. Amen.

～と 生命を 来たるべき 世の アーメン

conj f.s.対 形.n.s.属(V.未分) n.s.属

※. ⑪の末尾、バッハ「ロ短調ミサ」では、「ad dexteram Déi Patris.」

神の (m.s.属)

4. SANCTUS

- ①. **Sáncetus, (3回) Dóminus Déus Sábaoth.**
 聖なるかな 主 神 万軍の
 形.m.s.主 m.s.主 ===== m.s.主 【ヘブライ語】
- ②. **Plēni sunt coéli et térra glōria túa.**
 充ちている 天は※ ～と 地は 栄光で 汝の
 形.m.p.主 --- beV.3p 現 m.p.主 conj f.s.主 f.s.奪 --- 所形 f 奪
 ※ coelum は中性だが「複数名詞の男性化」
- ③. **Hosánna in excélsis.**
 オサンナ ～に 天（至高の）
 【ヘブライ語】 prep --- 形名,m.s.奪
- ④. **Benedíctus qui vénit in nōmine Dómini.**
 祝せられる [その人は] 来る ～のもとに 名 主の
 V.完分(形 m.s.主) ← 関代.m.s.主 → V.3s 現 --- prep --- n.s.奪 ←----- m.s.属
 ※主動詞が省略「qui ～の人は祝されよ」
- ⑤. **Hosánna in excélsis.**

※. ②の末尾、バッハ「ロ短調ミサ」では「tua」の代わりに「éjus」
 彼の (代 m.s.属)

5. AGNUS DEI

- ①. **Āgnus Déi, qui tóllis peccāta mún̄di,**
 子羊 神の [主] 取り除く 罪を 世の
 m.s.主 ←----- m.s.属 関代 m.主 → V.2s 現 ←----- n.p.対 ←----- m.s.属
- ②. **miserēre nōbis.**
 憐れみ給え 我々を
 V.2s 現.命 ←----- 代 1p.与
- ③. **dōna nōbis pācem.**
 与え給え 我々に 平和を
 V.2s 現.命 ←----- 代 1p.与 f.s.対

※. ①②→①②→①③と唱える

※. レクイエムでは②③の歌詞が下記ようになる。

- ②. **dōna éis requiem.** ③. **dōna éis réquiem sempitérnam.**
 与え給え 彼らに 平安を 与え給え 彼らに 平安を 永遠の
 V.2s 現.命 ←----- 代 3p.与 f.s.対
 f.s.対 ←----- 形,f.s.対

(B). レクイエム固有文

1. 入祭唱 (Introitus)

Réquiem aetérnam dōna éis, Dómine,

平安を 永遠の 与え給え 彼らに 主よ

f.s.対 ←----- 形,f.s.対 V.2s 現.命 ←-- 代 3p.与 m.s.呼

et lūx perpétua lūceat éis.

そして 光が 永遠の 照らされんことを 彼らに

conj f.s.主 ----- 形,f.s.主 V.3s 現.接 --- 代 3p.与

Te decet hýmnus, Déus, in Sión,

汝を 飾る 讃美歌は 神よ ~にて シオン

代 2s.対 → V.3s 現 ← m.s.主 m.s.呼 prep

et tíbi reddētur vōtum in Jerūsalem.

そして 汝に 果たされるだろう 誓いは ~にて エルサレム

conj 代 2s.与 --→ V.3s 未.受 ← n.s.主 prep

Exáudi oratiōnem méam,

聞き給え 祈りを 私の

V.2s 現.命 ← f.s.対 ----- 所形 1s,f.s.対

ad te ómnis cáro véniet.

~の傍らに 汝 全ての 肉体(人)は 来るだろう

prep --- 代 2s.対 形,f.s.主 ----→ f.s.主 → V.3s 未

4. 続唱 (Sequentia)

①. Díes īrae, díes ílla

日 怒りの 日 その
f.s.主 ←-- f.s.属 f.s.主 ←-- 指形,f.s.主

sólvet saéclum in favílla:
破壊するだろう 世を ～に 灰
V.3s 未 ←-- n.s.対 prep ----- f.s.奪

téste Dávid cum Sibýlla
証言者 ダヴィデ ～と共に シビラ
m.s.奪※ m.主 prep ----- f.奪

※証言者 testis。奪格の「手段」用法？

②. Quántus trémor est futūrus,

どれほど～か 恐怖は である 将来の
疑形,m.s m.s.主 → beV.3s 現 形,m.s.主

quándo jūdex est ventūrus,
～の時 審判者が 来るであろう
関副(=when) m.s.主 → beV.3s 現 ----- 形,m.s.主 (V.未分)

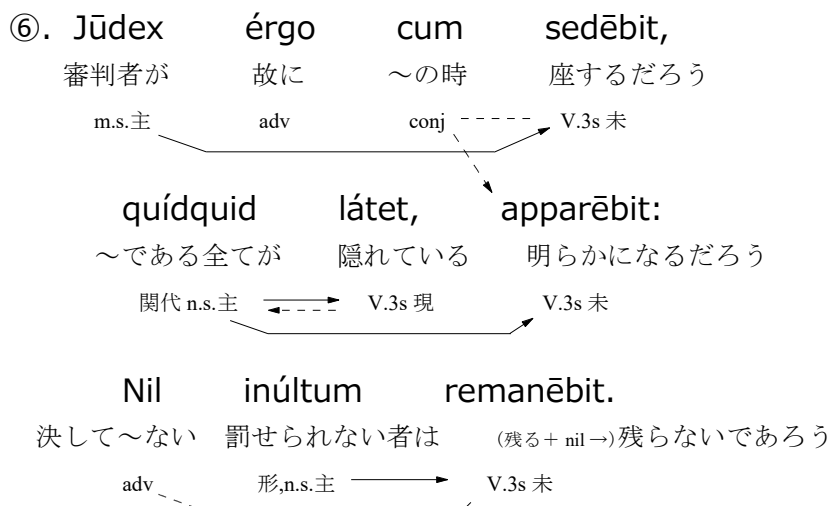
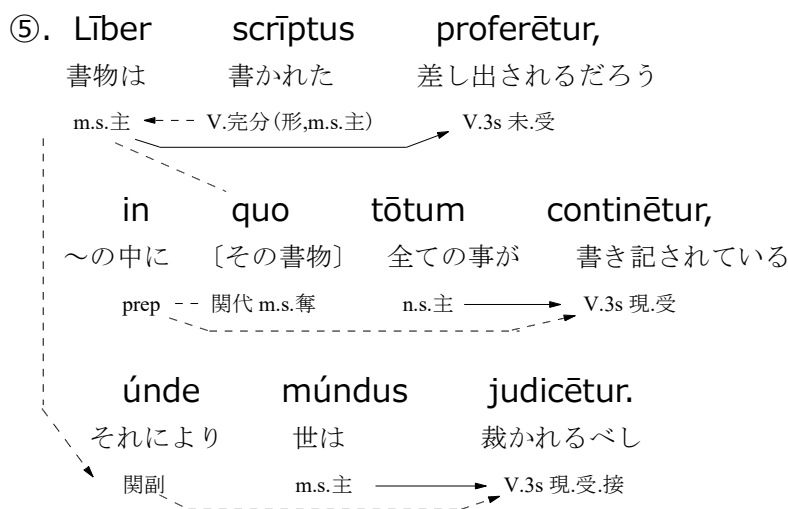
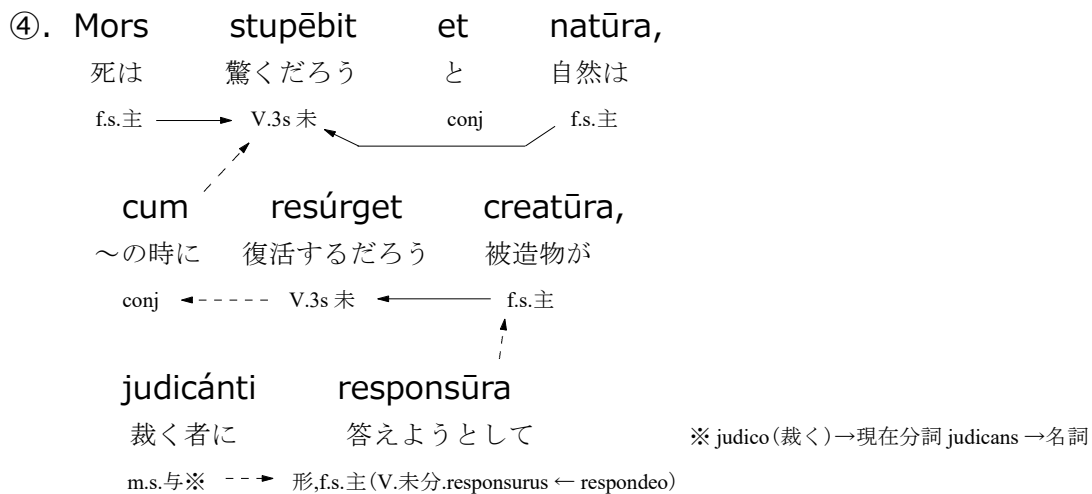
cúnc̄ta stríc̄te discussūrus.
全てを 厳格に 粉々に打ち砕くであろう
n.p.対 adv ----- 形,m.s.主 (V.未分← discutio)

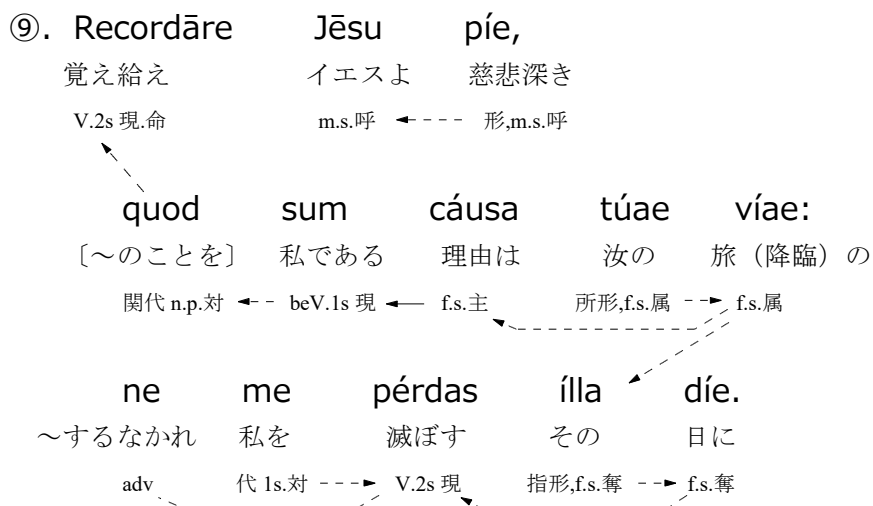
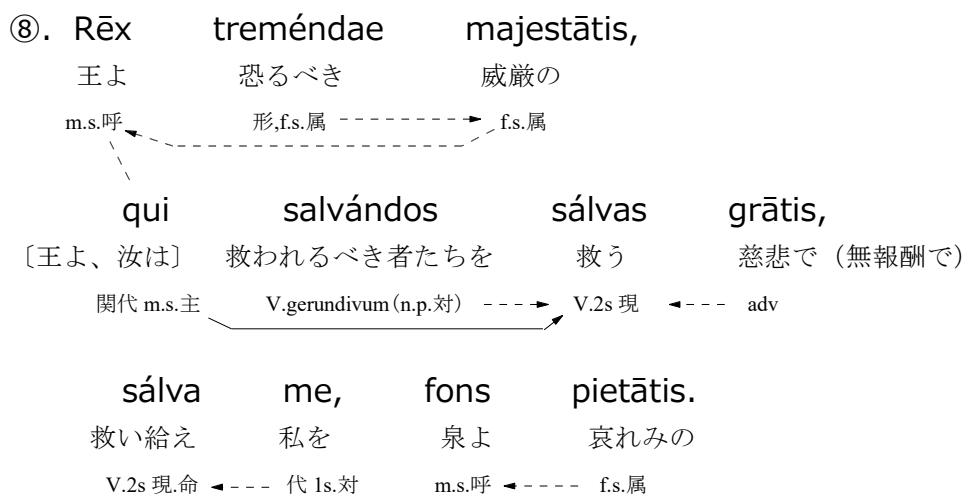
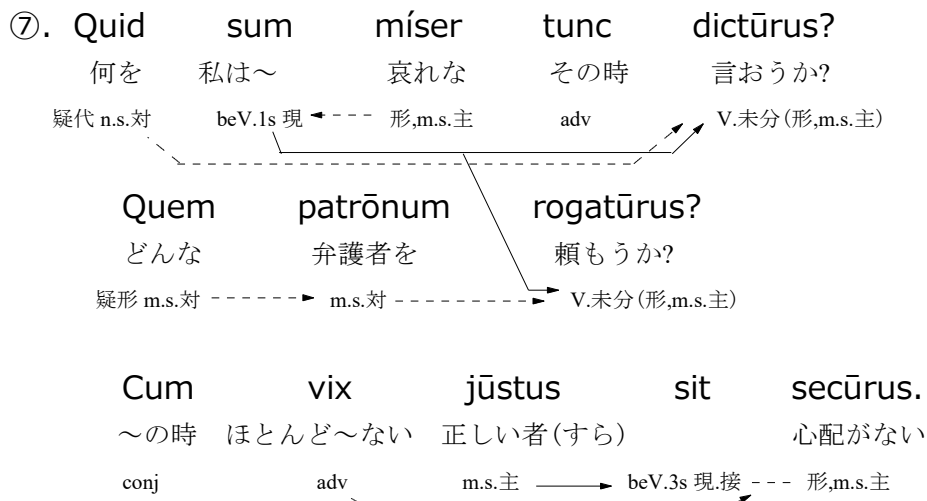
③. Túba mīrum spárgens sónum

ラッパは 不思議な まき散らす 響きを
f.s.主 形,m.s.対 V.現分(形,f.s.主) ←-- m.s.対

per sepúlchra regiōnum,
～の上に 墓 国々の
prep ----- n.p.対 ←-- f.p.属

cōget ómnes ánte thrónum.
集めるだろう 全てを ～の前に 玉座
V.3s 未 → n.p.対 prep ----- m.s.対





- ⑩. Quaérens me, sedísti lássus
 探し求め 私を 汝は座られた 疲れて
 V.現分 ←----- 代 1s.対 V.2s 完 ←----- V.完分(形,m.s.主)
- Redemísti crúcem pássus
 汝はあがなった 十字架で 苦しみを受け
 V.2s 完 f.s.対 ----- V.完分
- Tántus lábor non sit cássus.
 かくも大きな 努力が 空しくならないように
 形,m.s.主 ----> m.s.主 adv 否定 --> beV.3s 現.接 <-- 形,m.s.主

- ⑪. Jūste jūdex ultiónis,
 公正な 審判者よ 刑罰の
 形,m.s.呼 --> m.s.呼 <----- f.s.属
- dōnum fac remissiōnis,
 恩寵を なし給え 許しの
 n.s.対 -----> V.2s 現.命 f.s.属
- ánte díem ratiōnis.
 ～より前に 日 決算の,裁きの
 prep ----- f.s.対 <----- f.s.属

- ⑫. Ingemísco, támquam réus:
 私は嘆く あたかも～のごとく 罪に問われた
 V.1s 現 <----- adv ----- 形,m.s.主

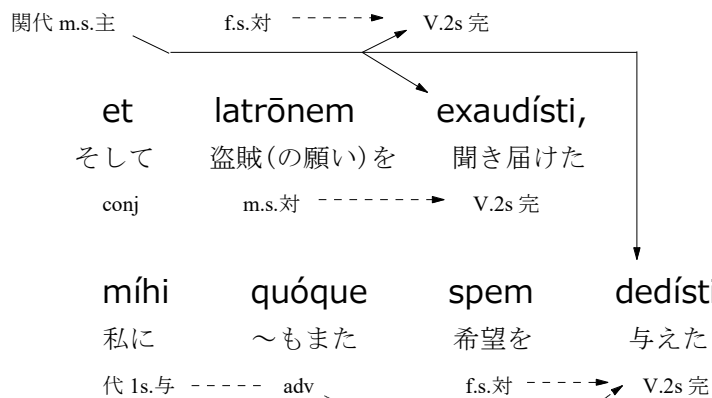
cúlpa rúbet vultus méus:
 罪により 赤面する 顔は 私の
 f.s.奪 ----> V.3s 現 <----- m.s.主 <----- 所形 1s.m.s.主

supplicánti párce Déus.
 嘆願する者を 惜しみ給え 神よ
 m.s.与※ ----> V.2s 現.命 m.s.呼

※ supplico → 現在分詞 supplicans → 名詞

⑬. Qui Marīam absolvísti,

〔主は〕 マグダラのマリアを 許した



※ 盗賊……ルカ福音書 23:39-43

イエスと並んで十字架に架けられた
2 人の盗賊のうちの 1 人がイエスを
信じ、イエスも彼を祝福した。

⑭. Préces méae non sunt dīgnae:

願いは 私の ～ではない 価値ある

f.p.主 ----- 所形 1s,f.p.主 ----- adv ----- beV.3p 現 ----- 形,f.p.主

Sed tu bōnus fac benīgne,

しかし 汝は 善良なる ～し給え 寛大に

conj 代 2s.主 ----- 形,m.s.主 ----- V.2s 現.命 ----- adv

Ne perénni crémer īgne.

～ないよう 永遠の 私が焼き尽くされる 火によって

adv ----- 形,m.s.奪 ----- V.1s 現.受.接 ----- m.s.奪

⑮. Íter óves lócum praésta,

～の中に 羊たち 場所を 授け給え

prep ----- f.p.奪 ----- n.s.対 ----- V.2s 現.命

et ab haédis me sequéstra,

そして ～から 山羊たち 私を 分かち給え

conj prep ----- m.p.奪 ----- 代 1s.対 ----- V.2s 現.命

státuens in páрте dēxtra.

定めて ～に 場所を 右の

V.現分 ----- prep ----- f.s.奪 ----- 形,f.s.奪

- ⑰. Confutātis maledíctis,
 汝は斥ける 呪われた者たちを
 V.2p 現(尊敬の複数形) ← n.p. 奪(V.完分)
- flámmis ācribus addíctis,
 火に 苛烈な 汝は落とす
 f.p. 与 ← 形,f.p. 与 → V.2p(尊敬) 現
- vóca me cum benedíctis.
 呼び給え 私を ～と共に 祝されし者たち
 V.2s 現.命 ← 代 1s. 対 ← prep ----- n.p. 奪

- ⑱. Ōro súplex et acclīnis,
 私は願う 膝を屈して そして 身をかがめて
 V.1s 現 形,m.s. 主 conj 形,m.s. 主
- cor contrītum quási cīnis:
 心は 砕かれて ～のように 灰
 n.s. 対 → V.完分(形,n.s. 対) ※ ← conj ----- m.s. 主
- gére cūram méi fīnis.
 司り給え 管理を 私の 終末の
 V.2s 現.命 ← f.s. 対 → 代 1s. 属 ----- m.s. 属
- ※完了・受動の不定法構文
 (完分+ esse だが esse は省略可)
 意味上の主語が対格(cor)になり、
 完了分詞も対応して対格となる。

- ⑲. Lacrimōsa díes ílla,
 涙多き 日 その
 形,f.s. 主 ----- f.s. 主 ← 指形,f.s. 主
- qua resúrget ex favílla
 [その日に] 復活するだろう ～から 灰
 関代 f.s. 奪 V.3s 未 ← prep ----- f.s. 奪
- judicándus hómo réus:
 裁かれるべき 人が 罪ある
 形,m.s. 主(V.gerundivum) → m.s. 主 ← 形,m.s. 主

①9. Húic érgo párcē Déus.
 ここに 故に 惜しみ給え 神よ
 指代(=here).与 adv V.2s 現.命 m.s.呼

píe Jēsu Dómine,
 慈悲深い イエスよ 主よ
 形,m.s.呼 --> m.s.呼 m.s.呼

Dōna éis réquiem. Amen.
 与え給え 彼らに 平安を アーメン
 V.2s 現.命 ← 代 3s.与 f.s.対

5. 奉献唱 (Offertorium)

①. Dómine Jēsu Chrístē, Rēx glōriae,
 主よ イエス・キリストよ 王よ 栄光の
 m.s.呼 m.s.呼 m.s.呼 ← f.s.属

lībera ánimas ómnium fidēlium defunctōrum
 解き放ち給え 魂たちを 全ての 信者たちの 死んだ
 V.2s 現.命 ← f.p.対 形,m.p.属 → m.p.属 ← 形,m.p.属

de poénis inférni, et de profúndo lácu;
 ~から 罰(複数) 地獄の ~と ~から 深い 淵
 prep ----- f.p.奪 ← m.s.属 conj prep 形,m.s.奪 → m.s.奪

lībera éas de ōre leōnis,
 解き放ち給え (魂たちを) ~から 口 獅子の
 V.2s 現.命 ← 代 f.p.対 prep ----- n.p.奪 ← m.p.属

ne absórbeat éas tártarus,
 ~せぬよう 飲み込む (魂たちを) 地獄が
 adv ----- V.3s 現.接 ← 代 f.p.対 m.s.主

ne cádant in obscūrum.
 ~せぬよう 落ちる ~に 暗黒
 adv ----- V.3p ※現.接 prep ----- m.s.対

※主語は「魂たち」

②. Sed sígnifer Sánctus Michāel

しかし 旗手 聖ミカエルが ※ 聖ミカエル……天軍の総帥たる大天使

conj m.s.主 形,m.s.主 m.s.主

repraeséntet éas in lūcem sánctam,

導かれんことを！ (魂たちを) ～へ 光 聖なる

V.3s 現.接 代 f.p.対 prep f.s.対 形,f.s.対

quam ōlim Ābrahae promísísti

[その光を] かつて アブラハムに 汝は約束した

関代 f.s.対 adv m.s.与 V.2s 完

et sēmini éjus.

～と 子孫に 彼(アブラハム)の ※アブラハム……イスラエル民族の祖

conj n.s.与 指代 m.属

③. Hóstias et préces tíbi, Dómine, láudis offérimus.

犠牲を ～と 祈りを 汝に 主よ 賛美の 我々は捧げる

f.p.対 conj f.p.対 代 2s.与 m.s.呼 f.s.属 V.1p 現

Tu súscepe pro animābus íllis,

汝は 引き受け給え ～のために 魂たちの その

代 2s.主 V.2s 現.命 prep m.p.奪 指形,m.p.奪

quārum hódie memóriam fácimus.

[魂たちの] 今日 記念を 我々が挙行する

関代 f.p.属 adv f.s.対 V.1s 現

Fac éas, Dómine,

～せしめよ (魂たちを) 主よ

V.2s 現.命 代 f.p.対 m.s.呼

de mórte transīre ad vītam,

～より 死 移す ～の方へ 生

prep f.s.奪 V.不定.現 prep f.s.対

quam olim Abrahae promísísti et semini ejus.

[その生命を] かつて汝はアブラハムとその子孫に約束した

6. 聖体拝領唱 (Communio)

Lūx aeterna lūceat éis, Dómine:

光は 永遠の 輝く 彼らに 主よ
f.s.主 ← --- 形,f.s.主 → V.3s 現 ← - - 代 3p.与 m.s.呼

Cum Sánc̄tis túis in aeternum, quía píus es.

〜と共に 聖者たち 汝の 〜の内に 永遠 〜が故に 慈悲深い 汝が
prep - - - - - m.p.奪 ← - - 所形,m.p.奪 prep - - - - - n.s.対 conj (because) ← - 形,m.s.主 ← - - beV.2s 現

Requiem aeternam dona eis Domine: et lux perpetua luceat eis.
Cum Sanctis tuis in aeternum, quia pius es.

7. 赦祷文 (Responsorium)

Lībera me, Dómine, de móрте aeterna,

解放し給え 私を 主よ 〜から 死 永遠の
V.2s 現.命 ← - 代 1s.対 m.s.呼 prep - - - - - f.s.奪 ← - - - - 形,f.s.奪

in díe ílla treménda,

〜に 日 その 恐ろしい
prep - - f.s.奪 ← - 指形,f.s.奪 形,f.s.奪 (※前述、複数名詞の男性化)

quándo coéli movéndi sunt et térra,

〜の時 天が 揺り動かされる 〜と 地が
関副 m.p.主※ V.完分 - - - - - beV.3p 現 conj f.s.主

dum véneris iudicāre saeculum per īgnem.

もし 汝が来るならば 裁きに この世を 〜を以て 火
conj - - - - - V.2s 完.接 ← - V.不定.現 ← - - - - - n.s.対 prep (=by) - - m.s.対

Trémens fáctus sum égo et tímeo,

震える 〜させられる 私は そして 怖れる
V.現分 - - - - - V.完分 - - - beV.1s 現 ← 代 1s.主 conj → V.1s 現

dum discússio vénerit átque ventūra īra.

もし 判決が 来るならば その上また 来たらんとする 怒りが
conj f.s.主 → V.3s 完.接 conj 形,f.s.主 (V.未分) → f.s.主

Dies illa, dies irae
 日 その 日 怒りの
 f.s.主 ← 指形,f.s.主 f.s.主 ← f.s.属

calamitātis et miseriae,
 禍いの ~と 不幸の
 f.s.属 conj f.s.属

dies magna et amara valde.
 日 大いなる そして 苦しい 大変に
 f.s.主 ← 形,f.s.主 conj 形,f.s.主 ← adv(=very)

Requiem aeternam dona eis, Domine: et lux perpetua luceat eis.

8. 楽園歌 (In Paradisum)

※この歌での「あなた」は「死者」を指す

In Paradisum deducant te Angeli;
 ~へ 楽園 随伴されんことを あなたを 天使たちが
 prep m.s.対 V.3p 現.接 代 2s.対※ m.p.主

in tuo adventu suscipiant te martyres
 ~にて あなたの 到着 迎えられんことを あなたを 殉教者たちが
 prep 形,m.s.奪 m.s.奪 V.3p 現.接 代 2s.対 m.p.主

et perducant te in civitatem sanctam Ierusalem.
 そして 導かれんことを あなたを 都市へ 聖なる エルサレム
 conj V.3p 現.接 代 2s.対 prep f.s.対 形,f.s.対

Chorus Angelorum te suscipiat,
 合唱隊が 天使たちの あなたを 迎えられんことを
 m.s.主 m.p.属 代 2s.対 V.3p 現.接

et cum Lazaro quondam paupere,
 そして ~と共に ラザロ かつては 貧しき
 conj prep m.s.奪※ adv 形,m.s.奪

aeternam habere requiem.
 永遠の あなたが保たれんことを 平安を 金持ちと対比される貧乏人
 形,f.s.対 V.2s 現.接 f.s.対

※.ラザロ……ルカ福音書 16:19-31 で

金持ちと対比される貧乏人

付録1. 主の祈り (Pater noster) 全文逐語訳

①. Páter nóster, qui es in coélis:

父よ 我らの [汝は] います ～に 天
 m.s.主 ←----- 所形,m.s.主 関代,m.主 → beV.2s 現 prep ---- n.p.奪

sanctificētur Nōmen Túum;

崇められますように 御名が 汝の
 V.3s 現.受.接 ←----- n.s.主 ←----- 所形,n.s.主

advéniat Rēgnum Túum;

来ますように 御国が 汝の
 V.3s 現.接 ←----- n.s.主 ←----- 所形,n.s.主

fiat volúntas Túa,

行われますように 御心が 汝の
 V.3s 現.受.接 ←----- f.s.主 ←----- 所形,f.s.主

sīcut in coélo, et in térra.

～ように ～における 天 ～においても 地
 conj ----- prep ----- n.s.奪 conj ---- prep ---- f.s.奪

②. Pānem nóstrum quotidiānum da nōbis hódie;

糧を 我々の 日々の 与えてください 我らに 今日
 m.s.対 ←----- 形,m.s.対 形,m.s.対 V.2s 現.命 ←----- 代 1p.与 adv

et dīmitte nōbis dēbita nóstra,

そして お許し下さい 我らに 罪(債務,複数)を 我らの
 conj V.2s 現.命 ←----- 代 1p.与 n.p.対 ←----- 所形,n.p.対

sīcut et nos dimíttimus debitōribus nóstris;

～のように 私たちが 許す 債務者たちを 私たちの
 conj conj 代 1p.主 → V.2p 現 ←----- m.p.与 ←----- 所形,m.p.与

et ne nos indūcas in tentatiōnem;

そして ～しないで 我らを 誘導する ～の中に 試練
 conj adv 代 1p.対 → V.2s 現.接 ←----- prep ----- f.s.対

sed libera nos a Mālo.

～でなく 解放し給え 我らを ～から 悪
 conj V.2s 現.命 ←----- 代 1p.対 prep -- m.s.奪

以上、マタイ福音書 6:9-13

頌栄：

Quía túum est rēgnum, et potéstas, et glōria in saécula.

なぜなら あなたのものです 国は と 力は と 栄光は ～の 世の
 conj 代 n.s.主 V.3s 現 n.s.主 conj f.s.主 conj f.s.主 prep n.p.対

付録2. 教会暦について

イエスが復活した「日曜日」を「主日」といい、この日に主日礼拝が行われる。
他に、日付が固定した固定祝日（聖人の記念日など）がある。

①. 待降節（Advent）

11月30日に最も近い日曜日を待降節第1主日とする。これが教会暦における新たな1年の始まりである。第4日曜日まで4回の主日がある。悔い改めの期間とされる。

②. 降誕節（Christmas）

降誕日である12月25日が第1祝日、26日が第2祝日、27日が第3祝日である。

ローマ帝国内でも栄えたミトラ教（アーリア人起源の太陽神をまつる宗教）における「不滅の太陽の誕生日（＝冬至）」を、キリスト教が吸収し、イエス降誕日が設定された。その日が帝国西部では12月25日、東部では1月6日であった。アルメニア教会では今でも1月6日をイエス降誕としている。

なお西方では1月6日を次項の「顕現日」としており、その日までが降誕節である。バッハの「クリスマス・オラトリオ」第6曲は顕現日用である。

③. 顕現日（Epiphany）

初め、エジプトでは1月6日はイエスの洗礼を祝う日として、クリスマスより古い祝日だった。西方教会では1月6日は顕現日（主の公現）としている（固定祝日）。

これはイエス生誕後、東方の三博士（マギ）がイエスを詣でた日であるとされる。

マタイ福音書2:1-13に博士たちの話があるが、人数は3人とは書いてない。黄金・乳香・没薬の3つを贈り物として捧げたことから3人とされたい。

マギ(magi=magicの語源)については、ヘロドトスの『歴史』に彼らの風習として鳥葬が書かれていることから、ゾロアスター教などイラン系の聖職者との説がある。

顕現節はその後、1月末もしくは2月初めまで4回の主日がある。

顕現節が終わる頃、2月2日にカトリックでは「主の奉献」という、イエスが生誕40日目に神殿に詣でたことを記念する祝日がある。1960年までは「聖母マリア御潔めの祝日」と称されていた。聖燭祭(Candlemas)という呼び名はこの日をキャンドルで祝うためである。ルター派でもそれなりに祝われているようで、バッハの有名なカンタータ第82番「我満ち足れり」はこの日のための曲である。

④. 七旬節（Septuagesima）

現在の教会暦では廃止されている（カトリックでは1969年廃止）。

なお、四旬節が始まる前の期間（各地で長さは様々）に、「謝肉祭（カーニバル）」という世俗の祝祭がある。物忌み期間前のどんちゃん騒ぎというわけである。

⑤. 四旬節（Lent、Quadragesima）

復活祭の46日前の「灰の水曜日」（2月4日から3月10日までのいずれかの日）から四旬節である。復活祭前40日の期間だが日曜日は数に数えないので46日前からとなる。英語のLentは、ドイツ語のLenz、すなわち春という意味がある。

受難と復活に備える期間であり、食事の節制と祝宴の自粛が行われてきた。

※. 復活祭の決め方

325年、ニケーア公会議で「春分の日後の最初の満月後の最初の日曜」とされた。

3月22日から4月25日のいずれかの日となる。

(なお、3月25日は「マリアへの受胎告知の祝日」で固定祝日である。)

⑥. 聖週間・受難週 (Holy Week, Passion Week)

・復活祭前第1日曜日

カトリック・ルター派では「枝の主日」、プロテスタントでは「棕櫚の主日」。
イエスがロバに乗ってエルサレムに入城した時を記念する。この時、群衆がナツメヤシの枝を手に持ち「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。」と迎えたという。(ヨハネ.12:13 = Benedictus の歌詞)

・聖木曜日 (洗足の木曜日)

イエスの「最後の晚餐」を記念する。ヨハネ福音書には、晚餐の際にイエスが弟子たちの足を洗ったことが書かれている。

・聖金曜日 (受難日)

イエスの十字架上の受難と死を記念する。
カトリック教会の典礼では、司祭と複数の朗読者、さらに会衆全員の参加によるイエスの受難の朗読が行われる。受難劇などを行うこともある。
ルター派の教会では、バッハのマタイ・ヨハネ両受難曲などが演奏される。

・聖土曜日 (大安息日)

四旬節最後の日である。翌日の復活祭に備える。

⑦. 復活祭 (Easter)

上記のように決定された日曜日から7週間が復活節である。カトリックでは最初の一週間は「主の復活の一週間」として毎日が主日となる。

復活の日から40日後の木曜日が「主の昇天日」である。イエスが弟子たちの前で天に昇ったことを記念する。その直後の復活祭後第6日曜日に昇天を祝う所もある。

⑧. 聖霊降臨祭・五旬祭 (Pentecostes)

復活祭から50日目の日曜日＝復活祭後第7日曜日である (5月10日から6月13日までのいずれかの日)。イエスの復活・昇天後、集まって祈っていた120人の信徒たちの上に、神からの聖霊が降ったことを記念する。翌月曜・火曜が第2・第3祝日となる。

⑨. 三位一体節

復活祭後第8日曜日が三位一体主日 (聖霊降臨後の日曜日) である。

この日以降、待降節までの間を三位一体節という。三位一体節の主日は最多で27、最小で23ある。第27日曜日用のバッハの教会カンタータが有名な第140番「目覚めよと、われらに呼ばれる物見らの声」である。

なお、バプテスマのヨハネはイエスの半年前に生まれたことになっているので、ヨハネ祭は6月24日＝夏至の日＝Midsummer Day となる。

その前夜は、シェクスピアの「真夏の夜の夢」、ムソルグスキーの「禿山の一夜」、ヴァーグナーの「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第2幕の馬鹿騒ぎの舞台となる。(これもまた異教的風習に覆い被せられた祝日のようである。)

あとがき

本書の原本は、東北大学混声合唱団在籍中、団内で「混声タイムズ」として発行したものである。

初版は私が大学2年の1985年8月発行だった。宗教曲になど全く関心がなかった1年の時にモーツァルトのハ短調ミサK.427を歌い、2年になって今度はフォーレのレクイエムを歌うことになって、歌詞を見ると、同じタイトルで同じ歌詞の部分があることに気づいたのである。

この時私は、何だか面白そうな宝の山を見つけたように感じた。「この決まった歌詞にいろんな作曲家が別の曲をつけている。それらを比較することは、まるでベートーヴェンの交響曲をいろんな指揮者で聴きくらべるのと同じ楽しみがあるのではないかと」。

ここで一念発起した私は、英語やドイツ語や（東洋史専攻なので）漢文の予習をそっちのけにして、歌詞をラテン語文法書と辞書をひいて独学で逐語訳し、ミサ式次第なども調べて解説を書いたのである。

今、手元に残っているのは翌86年6月発行の改訂第2刷である。藁半紙にガリ版刷りなので、黄ばんでシミだらけの古文書と化している。

それから30年以上たった2017年11月、再び思い立ってこれを大幅改訂・加筆したのが本書である。

本書の表紙タイトルと裏表紙のデザインは、原本の表紙をスキャンして取り込んだものである。ラテン語ミサの解説書なのに、バッハ「マタイ受難曲」の「まことに彼は神の子であったのだ」の4部合唱の楽譜をデザインしたのは理由がある。「キリスト教音楽の最高峰はバッハのマタイであり、これを聴けば、信仰の無い人もキリスト教の何たるかを感じることができる」と考えていたのである。（現在もその考えは変わらない。）

学生時代、私のこのミサ全訳発刊の後、今度は1級下の学年の団員が「ラテン語の発音について」という冊子を同じく団内で発行していた。これも古文書と化したものが手元にある。

今回の大改訂で当初は、発音については、大変な作業になりそうだから加筆するつもりはなかった。しかし結局やることになってしまった。その際、もちろん後輩の冊子も参照させてもらった。

教会暦については、以前に自分で調べて WebSite に1ページ作成していた。その後、「キリスト教歳時記」（八木谷涼子、平凡社新書）というコンパクトな本も入手。これらをもとに新たに書いた。

今回の改訂作業は、まずは勤務校の図書室にあるラテン語文法書と辞書を使って始めた。しかしこのご時世、頼りになるのは何と言ってもインターネットである。30年前はパソコンも無かったことを考えると隔世の感がある。

通常文については、インターネット上のブログ「ミサ通常文を純粋にラテン語の文章として解説するページ(http://blog.livedoor.jp/missa_ordinarium/archives/51777661.html)」を参照させていただいた。

また、紙の辞書でわからない単語が多かったので、ネット上で翻訳機能を探しているうちに、「ラテン語英語辞書オンライン」(<https://glosbe.com/la/en/>)というサービスを見つけた。例えば descendit と入力すると、「third-person singular present active indicative of dēscendō」と出てくるし、活用表も見られる。

他に参考にしたのは次の2冊。大震災前に購入してあったが、ようやく役立たせることができた。

大西英文「はじめてのラテン語」（講談社現代新書）

逸身喜一郎「ラテン語のはなし ― 通読できるラテン語文法」（大修館書店）

そのうち、Sabat mater や Magnificat などこの形で逐語訳してみたいが....

2017. 11. 30 （フルトヴェングラーの命日）

山岸 健一 （仙台宗教音楽合唱団）

J. S. BACH Matthäus Passion. ~ Nr. 73

pp cresc. f dim. pp

Warlich dieser ist Gottes Sohn — gewe — sen

Warlich die-ser ist Gottes Sohn ge-we — — sen

warlich dieser ist Got — — tes Sohn ge-we — — sen

Warlich die-ser ist Gottes Sohn ge-we — sen



初版発行 1985年8月
改訂第2刷発行 1986年6月

著 山岸健一